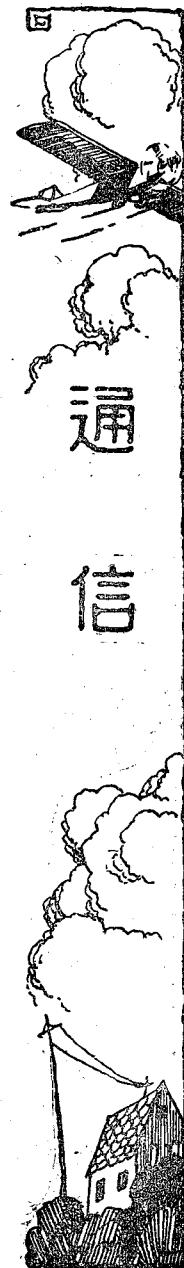


# 琉球紀行

貴地邦生

はしがき

沖縄の事物については、もう大抵世間に紹介しつくされてゐることゝ思ふ。つひ最近も文藝春秋だつたか何かの雑誌に、その花街の事が記されてあつたと云ふことを聞いた事がある。で今更、事新しく紹介することもないやうに思はれる、然しまた沖縄ほど世人に知られてゐない縣も少ないやうである。知られてゐないと云ふよりも、寧ろその存在を忘れられてゐると云ふ方が當つてゐるかもしない、これは一體何に原因するのであらう、地理的に政治や經濟の中心とあまり距つてゐる故であらうか、風土や氣候や習慣などの相違が、縣自體の活動力を殺いでゐる故であらうか、私は今茲でそれを穿索しやうとするのではない、たゞこの六月初旬に茲に旅して、僅二日間ではあつたが、その特異な南國の風物に接することが出来たので、見たまゝ聞いたまゝを摘録するに過ぎない。



## 神戸から那覇へ

するところが多からう。

×

沖縄へ旅をするには、現在では、二つの途より外にな  
い。二つとも無論船の便を藉らなくてはならない。神戸を  
正午に出帆する船に乘れば、四日目の朝那覇に着くし、鹿  
児島を午後五時に拔錨する船は、三日目の早朝那覇に着く。  
この二つの航路、前者は大阪那覇線、後者は鹿児島那覇  
線と呼ばれてゐる——は何れも政府の命令航路になつてゐ  
て、大阪那覇線には、大阪商船會社の三千噸級の客船二隻  
が月に五回、鹿児島那覇線には、同じく千八百噸級の客船  
二隻が月に九回就航してゐるから、この双方を合するとき  
は、一ヶ月に十四回の便船がある理ではあるが、どの航路  
を選ぶにしても、東京を出發して那覇に到着するまでに、  
少くとも五日の日數を要するのが、スピード時代の今日沖  
縄を甚だ遠隔の地のやうに感ぜしめる。今後航空路でも拓  
けて、せめて二三日で行けるやうになつたならば、旅客の  
利便もさることながら、沖縄縣の開發の上にどんなに寄與

私は神戸から行く旅程を選んだ。東京から鹿児島まで汽  
車に搖られて、更に汽船で三日間を過すよりは、船で過す  
日は一日だけ長いが、神戸から乗船する方が、寧ろ疲勞が  
少なからうと思つたからである。然し船に弱い人は鹿児島  
那覇線を選ぶ方が良からう。

×

五月三十一日の朝、私は神戸の埠頭から三百メートルばかりの港内に假泊してゐる臺中丸の甲板に立つて、初夏の輝かしい陽光を浴びた六甲、摩耶の山々を眺めてゐた。前夜遅く東京を出發した私は、三ノ宮驛に着くや直に車を驅つて埠頭へ——埠頭から汽艇でこの船へ運ばれて來たのである。出帆を前にした船の活動は實にめまぐるしいばかりだ。起重機はしきりに轟々たる響をあけて、山と積んだ幾艘かの傳馬船の積荷を船倉へ卸してゐるし、汽艇は次から次へ波止場から船客を滿載して來る。その船出する人や見

送る人に埋れた甲板には、忙しげに右往左往する船員の緊張した顔が見える。煙突は時々黒烟を空へあけてゐる。

やがて出船を知らせる

銅鑼の音が響き渡ると、

喧嘩が一しきり激しくな

るが、程なく最後の汽艇

が船を離れ行く頃には、

船は不氣味なほど静まり

かへる。

正午鈍重な長い汽笛を

二聲残して船は港口へ向

けて徐々に搖ぎはじめ

る。私はベンチに凭つて、

神戸の街が次第に遠ざ

かつて行くのを、宛も遠

くへ船出して行く旅人のやうな淡い哀愁に包まれながらい

つまでも眺めてゐた。この船の一等の船室は、中甲板に

あつて、光線は直徑一尺程の二つの丸窓から這入るばかりだから少し陰鬱ではあるが、排水噸數三千二百噸の汽船に

しては室内の設備は良い方であらう。船室の定員は二人、一方の壁際に寝臺が二個上下に設けられてあり、

その他に卓子や長椅子や化粧臺などが所狭いまでに備

付けてある。しかし食堂兼

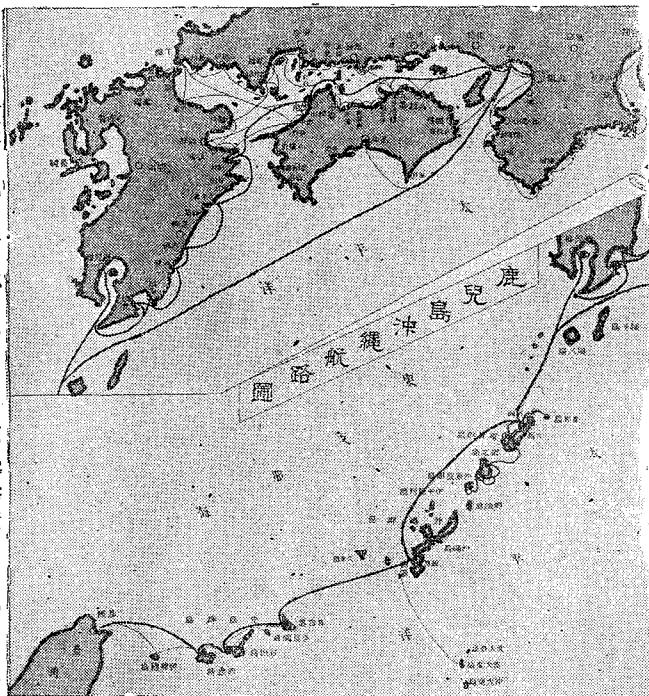
用の廣闊な明るい客室が上

甲板にあつて、そこには色々の娛樂設備があるから、

船室よりも客室で日を過す

方が遙かに氣持が朗かで良

い。船には無船電信局もあるし、醫務室もある。それ等の點では外國航路の大汽船に比べても遜色がないと船長は誇つてゐた。



船は時速十一浬で、淡路島を右に見て南へ航行する。紀

淡海峽を過ぎ紀伊水道（紀伊と阿波との間）を南へ進む頃には、その日も陽は傾いて夕靄が海の面を蔽ふのである。

その夜は十三日頃の月が輝き渡る海に、無数の漁火が映つて、星を鏤めたやうで美しかつた。

×

二日目の朝めざめた頃には船は土佐の沖の遙か洋上を東西に向つて進んでゐた。

海上では夜の明けるのが陸より遙かに早い。甲板へ出たときはまだ六時を過ぎたばかりであつたが陽は既に空に高く昇つてゐた。船の第一夜は多少船酔の氣味で早く寝に就いたが聞きなれぬ汽罐の音に夜半の夢は破れ勝であつた、今太平洋の朝風を浴びて、幾羽となく海鳥の群が船をめぐつて波に戯れてゐるのを見てると、陸では味へない爽快さを覺える。

今は何處を見ても陸影を認めることが出来ない。

今日も航海は平穏だと私の室の給仕が言ふ。しかし大洋

の平穏と言ふ言葉は瀬戸内海などの夫れと少し趣が違ふ。

大きな波の峯が遙か彼方から時には高く、時には低く寄せて來るかと見れば、忽ちにして舷を叩いて白く碎ける。その度に船は相當大きな角度で前に後に傾斜するのである。

午後になると右舷にあたつて日向の山々があらはれてくる。そしてその日も黃昏の頃には左舷遙かに種子島を望んで大隅海峡に入り徐々に針路を南へ換へるのである。

×

前日まで太平洋の波に乗つて來た船は三日目の朝は東支那海の波を蹴立てゝひたすらに南へ進む。船の一日は實に單調で退屈なものだ。三日目になると無聊に苦しんでしまふ。船室に退いて本を読むのも憚いので終日甲板を遊歩する。船室に退いて本を読むのも憚いので終日甲板を遊歩するか、客室で煙草を燻らして談笑するばかりだ。客室の一隅はいつも麻雀を弄する一組で賑つてゐた。

あがれが鬼界島だと言ふ船長の指す左舷の方に小さな島影の泛ぶのを見る。周圍凡そ三里、今も筆投石や足摺石などの趾が残つてゐて旅人の涙をそぐるものがある。船長はな

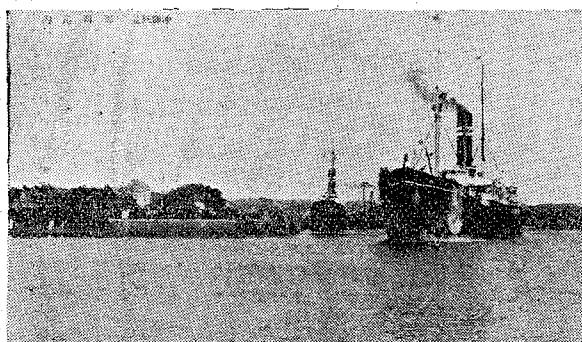
かなか悉しく述べてくれる。言ふまでもなく俊寛僧都の遠流されたあの孤島だ。「せめて思のあまりにやさきに読みたる巻物を又引ひらき同じあとを繰りかへし繰りかへし……」巻かへして見れども僧都とも俊寛とも書ける文字は更になし」謡曲俊寛の一節が回

想されて一しほあはれを感じる。船の事務長S氏も話好きな温厚な紳士で、食事の後にはいつも彼の長い海上生活の思ひ出を語つてくれた。

その日鹿児島縣下の奄美大島の名瀬港に寄港する。大抵三時間あまり停泊するので、舟を駆つて上陸、三日振りで土を踏み土の香に懷しむことが出来る。茲は有名な大島絹の産地、茲まで來るとあたりの風物が南國的景趣を帶びて、氣温も高く、岩山の間に大きな蘇鐵などが密生してゐる。言語風俗などもよほど異つてゐる。

午後三時名瀬を出帆してからは左舷にあたつて大小群嶼の應接に違がない。所謂奄美群島である。愈沖縄が近づいて来る。その日も海の入日の美しさに見とれて暗くなるまで甲板を歩いた。

×  
で甲板を歩いた。



翌朝めざめると船の針路と併行して蜿蜒たる丘陵の起伏した島が横たはつてゐるのを見る。今や船は沖縄島の西岸に沿ふて進んでゐるのである。八時半には那覇に入港するので朝食の時間が繰り上げられる。船の最後の朝食をあはたゞしく済ませて下船の身支度を整へるうちに、那覇は愈目曉に迫つて來た。

×

船から遠望する那覇市は四日の間たゞ碧空と蒼海とを見つめて來た旅人の眼に如何に美しく映じることであらう。

ところどころ赤い地肌をあらはした緑の丘陵を背にして

その斜面のあたりから海邊にかけて赭い蔓と白い壁の交錯

した街衢が擴つてゐて、それが今しも雨期を脱した南國の明るい空に映し出されてゐるのを見ると、異國の近代都市を想はせるやうな景趣がある。しかしこれは那覇の遠景美である。その近景は遠景美に陶酔した旅人の心に幻滅を感じしめるほど雑然とした港町に過ぎない。

この附近の海底は珊瑚礁に蔽はれてゐるので船はその間を開鑿した狹長な入口によつて港内に導かれるのである、がその港内も極めて狭い。そこには既に大阪商船會社の僚船が三隻投錨してゐる外に大小の船舶が輻輳してゐて船を繫留するにも困難を感じしめる。我臺中丸は今や岸壁を前にして一旋回の後船首を港口に向けて繫留されたのである

六月三日午前九時、神戸から遙々六五〇浬の海路を旅し

て私は今未知の國琉球への第一歩を印したのである。

本州ではこれから梅雨期に入らふとしてゐるのに、こゝは既に雨期を脱して盛夏に這入つてゐるので、棧橋に群る

人々も麻服に麥藁帽子と言ふ裝の人多かつた。

×

私の今回の旅は便船の都合で、沖繩縣に滯在する日數を到着の日を加へて僅か三日に制限しなければならなかつた。而もその三日目の夕にはこの地を去つて鹿兒島へ向ふことになつてゐるので實に慌々しい旅である。宿に少慰して次のやうな行程によることに決める。

第一日目は先づ、今度内務省が直轄で改良工事を施行する國道を視察した後、那覇首里兩市の内外を巡覽する。第二日目は那覇から本島の西岸を北へ縦走して名護町へ行つて歸覇、第三日目は那覇から北東へ普天間と言ふ所へ行つて太平洋沿岸に出、更に南下して與那原を経て歸覇、午後五時出帆の首里丸に乗船して琉球に別れを告げる。

宮古、八重山の諸島へは遂に渡る餘裕を持たなかつた。

沖繩を知るには先づ、その自然地理の概要を心得ておかなければならぬと言つて縣土木課長の千葉さんが地圖を

擴げて説明してくれたのを要約すると次のやうになる。

×

沖繩縣は臺灣と鹿兒島縣との略中央に——詳しく述べば東經百三十一度十九分、北緯二十七度五十一分から東經百二十二度五十五分、北緯二十四度四分に亘る間に散在する大小六十有餘の島嶼から成つてゐる。其の最も大なるものを沖繩島と言ひ周圍凡百十里俗に之を本島と呼び、之れに亞ぐ八重山、宮古の二大島を先島と唱へ、全縣の面積は百五十五方里である。海岸は屈曲が多くその海岸線の延長は三百九十里にも達するが、近海は概ね珊瑚礁に蔽はれてゐるので天然の良港に乏しい。

本島の地勢は東北から南西に蜿蜒として長蛇の洋上に横はるに似てゐる。沖繩と言ふのも琉球と稱ぶのもその名は何れもこの地形から出た名稱で琉球は元流蚪と書いたものだと言はれてゐる。島内には高山靈峰なく、長河大川なく、一帶に丘陵が起伏してゐて其の間に僅な平野がある。

本縣は亞熱帶に在り加ふるに海洋的氣象の影響を受けて

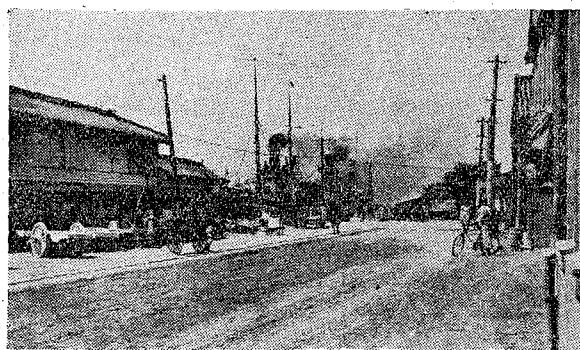
夏期が著しく長く四季晝夜寒暖の差が少ない、夏七八月の頃の最高溫度華氏九十五度、冬期一月の最低溫度四十度であつて、嚴寒の候でも、霜雪を見る事は絶無である。空氣は水蒸氣を多分に含んでゐて一年の過半は雨天であると言ふも過言でない。此の地の雨期は普通五月で内地よりも一ヶ月早い。

四季を通じて風が強く、夏季は颶風の襲來を以て知られてゐる。既住に於ける最強風は八重山島七米強、那霸に於て四十七米を示してゐる。

### 失業救濟國道改良箇所を見る

國道二十六號と言へば、東京から沖繩縣廳に達する路線であるが、其の専用延長は那霸港棧橋から沖繩縣廳に至る十六町五十四間で、言ふまでもなく本縣唯一の國道である。沿道は那霸市内の目抜の場所で、商家が櫛比してゐて賑かだ。道路の幅員は一樣ではないが概ね六間はあるのであらう。一部分沖繩電氣會社の軌道併用區間があり、所々に街

路樹も植えられてある。街路樹と言つても、茲のは東京などの街路に一定の間隔をおいて整然と植えてあるやうな街路樹ではない。盛夏烈日の下を往来する人がその蔭葉で憩むために植えたもので、間隔も不揃なれば、あるものは著しく道路の中央に出でるし、あるものは殆んど家屋の軒先に接してゐて其の外觀は甚だ不體裁だ。昔の街道筋によくある並木と大差ない。今度の改良工事ではその所謂街路樹の間を鋪装することになつてゐるやうだが、都市の美觀から言つても、近代道路の態様から言つても、序に此の街路樹を少し整理して體裁を整へる必要はなからうか。



六十二 號國道ノ一部

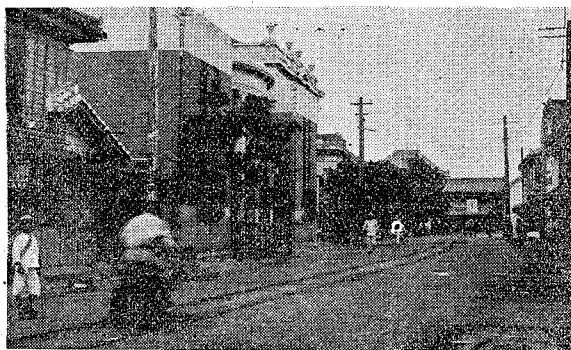
當がつかない。強いて言へば砂利道と言へるかもしれないが、もとより私の知る限りでは砂利道の部類には入らない。元來この沖繩縣殊に本島の南半部には、河川と名付けるやうな水流がない。その上に周圍の海底は主として珊瑚礁で蔽はれてゐるので、砂利や砂を産しないのである。地質も多くは粘板岩か石灰岩で成つてゐるから碎石とするに適した岩石にも乏しい。此のやうに道路材料に缺乏してゐる結果、道路の築造や修繕には、自ら特殊な工法が用ひられてゐて、聞くところによると、石灰岩の割石を相當の厚さに敷き並べてローラーで輒壓した上に、海底から採取した珊瑚礁を砂利の代用として撒布するのが現在一般に行はれてゐる方法ださうである。

土木課長はこの道路をマカダム道の一種であると言つて

ゐた。

この道路は築造の當初は、極めて堅牢で坦々砥のやうな良い道路であるけれど、石灰岩にしても珊瑚礁にしても、その質は極めて脆弱で風化し易いものであるから、車輪に粉碎せられたり風雨に曝されたりする中に、幾程もなく路面は一體に白い灰を撒布したやうな状態になつて、それが一度降雨に際會すると、忽ち泥土と化して歩行を難澁せしめると言ふ事である。

今度の改良工事が完成したならば、國道だけは面目を一新して、他の府縣の大都市に劣らない形態を備へることになるから、夫れだけでも那覇市にとつて大きな幸福を齎すものと言はなければならぬ。



六十二号國道の一部

一丁目那覇港棧橋から美榮橋町御成橋際に至る延長一、八三五米の間にコンクリート鋪装を施工することに決定してゐるが、當時は未だ工事に着手してゐなかつた。事業の目的を達成するため、失業者の最も多い時期を選ぶ必要があり、大體七月上旬に起工し今年中に竣工せしめる豫定になつてゐた。

×

道路は此の國道の外に府縣道三十一路線、延長八十五里餘及市道町村道を合せて千八百十八里に達するさうだが、府縣道を除いて車馬の通行に供する道路は僅かに九十九里を算するに過ぎない。他は多く山間や丘陵が起伏してゐる間を辛うじて馬背によつて通行し得る程度の未改修道路である。

因に本縣の失業救濟國道改良工事は、設計書によると工費五〇、八四〇圓（金額國庫負擔）を以て、那覇市西新町

## 産業十五ヶ年計畫

沖繩縣廳は國道の終點の高臺にある木造白堜の二階建である。相當廣い前庭にしつらへた幾つもの階段を昇ると玄關に達する。長官井野次郎閣下に面謁して敬意を表する。

丁度縣では、産業十五ヶ年計畫と言ふ宏大な計畫を目論んで、來年度から實現しやうと言ふので、長官以下主腦部は大童になつて豫定の査定中であつた。

一般に沖繩縣は世間から起債能力が缺けてゐるやうに見られてゐるし、財政的には疲弊困憊の極にあるのである。此の財政難を根本的に立直すのには、一定期間政府の特別な援助に俟つて、開發上必要な施設を完成し、産業の基礎を確立するより外に途がない。それで今大正九年から昭和四年に至る過去十年間に於ける本縣の國庫金の收支狀況を

調べて見ると、收入の方では租稅外收入を合せて七〇、四三六、〇九八圓を擧げてゐるのに反し、支出の方は僅かに二八、一七六、三六九圓に過ぎないのであるから、差引四二、二五九、七二九圓の收入超過額は國庫の收入に歸してゐる勘定になる。即ち國庫が、過去十年間その支出を差引いて萎縮してゐる沖繩縣から收納して來た結果が、縣財政を今日のやうに窮迫せしめるやうになつたのであるとも考られる。であるから、毎年國庫が收納するこの四百二十萬圓を向ふ十五箇年間免除して貰つて、言ひ換へれば沖繩縣に於ける國庫の收入はその全部を擧げて、産業振興の資に充てたいと言ふのが此の産業十五ヶ年計畫案の財源の骨子をなしてゐるのであるが、此の計畫案はまだ査定中で確定したものでなかつたから、その施設の内容については遺憾ながら深く聞くことが出来なかつた。

## 那霸と交通

沖繩縣に市制や町村制が施行せられるやうになつたのは、極く最近のこととて、大正十年五月までは、那霸、首里兩市は沖繩縣區制に支配せられて區と稱してゐたし、その

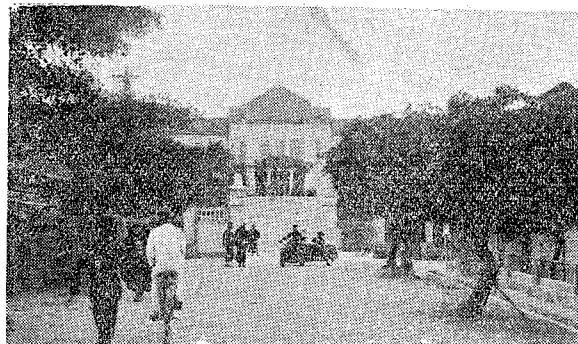
他の町村も島嶼町村制に律せられてゐたが、區制の廢止と共に、普通の市制、町村制が施かれて、他の府縣に於けると同一の取扱を受けるやうになつた。現在二市、四町、五十村を有するけれど、何れの市町村もその財政状態は縣同様甚だ豊でない。

×

那覇は何と言つても沖繩の門戸であり、政治經濟交通の中樞であるだけあつて、人家稠密、面積僅かに〇・三三一方里に過ぎないので、人口五萬六千人を有してゐる。

その港灣は前にも述べたやうに極めて狭隘ではあるが、第二種重要港灣に選定せら

れて居て、今日三千噸級の汽船三隻をその棧橋に繫留するだけの設備を完成するまでは、遠く明治四十年から前後二十五ヶ年の歲月と、三百十八萬五千圓の工費（國費二百二十萬五千圓、縣費九十八萬圓）を費して修築したもので、今年度



沖繩は四圍海に囲繞せられてゐるから管外交通はもとより、管内交通も、之を海運に求めるより外に途がない。然るに港灣の現状を見ると、那覇港を除いては、僅かに漲水港石垣港の二指定港湾と二三の漁港を有してゐるに過ぎ

共に本縣に於ける交通の状勢も年を逐ふて進展して、大阪鹿兒島、基隆の三定期航路の汽船の外、臨時に茲へ寄港する船舶も、晚近頗る増加して、最近一

ヶ年間に出入した船舶を擧げると、一、

五一五隻（六七五、〇〇〇噸）出入貨物一、七三三、〇〇〇噸、出入船客一

〇五、〇〇〇人の多きに達するやうになつたので、當初の計畫による現在の設備では、既に狭隘を告げるやうになつた。

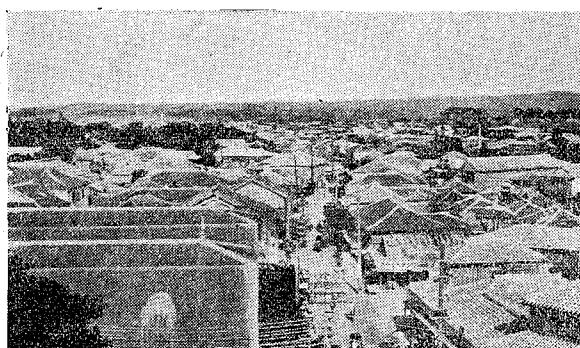
×

沖繩は四圍海に囲繞せられてゐるから管外交通はもとより、管内交通も、之を海運に求めるより外に途がない。然るに港灣の現状を見ると、那覇港を除いては、僅かに漲水港石垣港の二指定港湾と二三の漁港を有してゐるに過ぎ

ない有様であるから、那覇港は實に沖繩の存立上重要な地位を占めてゐるのである。それで今後一萬噸級の船舶を自由に出入せしめ得る設備を完成して、内地と臺灣の中間に介在する良港たらしめやうと言ふのが、縣當局の理想ださうであるが、

現在の縣財政状態では到底これが實現は困難であるから、差當り大阪臺灣航路に於ける六千噸級の汽船を收容するのを目標にして修築計畫をたてることゝし、前記產業十五ヶ年計畫案にも、その經費を計上することになつてゐるさうである。

X



間は二呎六吋、輕伊鐵道の域を脱しないが、本島内の交通機關としては相當重要な地位を占めてゐて經營狀態は良好である。建設費一、七五八、〇〇〇圓

一ヶ年の乗客一、一七八、〇〇〇人二

三一、〇〇〇圓の収益を擧げてゐる。

那覇鐵橋から那覇市内を横過して首里市に達する延長四・三哩の電氣軌道の

市外に、與那原、泡瀬間一一哩及垣花、

糸満間五・八哩に馬車軌道が運轉され

てゐるが、電氣軌道を除いては、何れ

も營業不振で、一日數回義務的に運轉

してゐるに過ぎない。軌道三線を通じての一ヶ年の乗客は一、三七七、〇〇

〇人、運賃收入は一〇五、〇〇〇圓に達するけれど、その

那覇を中心にして、本島内の交通の幹線をなすものとしては、道路の外に、地方鐵道三線と電氣軌道一線とを擧げることが出来る。

地方鐵道は、與那原、嘉手納、糸満に達する三線、延長三一・八哩であつて、縣營鐵道管理所で運轉してゐる。軌

X

近年自動車による交通も他府縣同様隆盛になつて來て、昭和三年末に四十數臺あつた自動車も現在では八十臺を超え乗合自動車營業線も一〇〇哩に達し、鐵道軌道等の交通機關の乏しいのに乘じて益々増加の傾向にある。何の地方でも同じであるが特に本縣のやうな地域の狹小な所では、

建設費に多額を要する軌道や鐵道の敷設は採算上不得策であるから、今後は自動車による交通が是等軌道や鐵道に代つて首位を占めるやうになるのであらう。

×

もう一つ、那霸市内の重要交通機關？を擧げて見やう。

東京ではもう數年前から往來で人力車の影を見ることが出来なくなつて、今日では偶々物好きな外國の觀光團の御用を承るか、さもなくば郊外の停車場の傍で僅かにその昔の佛をとどめてゐるに過ぎないが、茲では人力車が我物顔に幅をきかしてゐる。全島に於ける人力車の數は九五〇臺。その大部分は那霸市内に集中してゐると言つても好い。饅頭傘を冠つた裸足の車夫が乗客を物色して街を彷徨してゐる

る狀は、十數年前の東京に髪髪たるものがある。全市十錢均一で用を達してくれるから、實に有難い交通機關であるが、旅人と見ると高値をつける朦朧車夫が少くないから、那霸に不案内的人は用心肝要である。

## 水道

那霸で一番困るのは水の缺乏してゐることである。飲料水は

大抵附近の丘陵に僅かばかり湧水するのを汲みとつて賣り

に來るのであるが、それは比較的上層の市民で一

般の市民は雨水を貯溜して腐敗するのも顧みずに日常の用に供してゐる。だから那霸に來ては、淡水の湯に浸らうなどゝは夢にも考へてはいけない。私は四日の航海中海水の湯に浴してゐたので上陸後第一に欲したのは湯に浸りたいことであつた。宿についた夕、一風呂浴びて寛ふと確めもせず浴槽に飛込んで後悔したものである。二日目には宿の主人に懇ふて、無理に天水で湯を沸して貰つた。

飲料水の缺乏は那覇市民の保健上憂慮すべきことであつて、年中消化器系の傳染病の絶えないことも、一般に衛生方面的の施設の不完全なのに起因してゐることは言ふまでもないが、中でも飲料水の不足が最も重大な原因であらうと言はれてゐる。それ故に水道布設の緊要なことは久しい以前から識者の間に唱へられてゐたのであるが、何分水源に乏しいのでいつも立消えになつてゐた。

ところが近年になつて那覇市から數里を距つた宜野灣村地内のオーグムヤー川外大小十一個所の湧水を利用して水道布設の計畫をたて、既に監督官廳から布設の認可を得てゐるばかりでなく、昭和四年度以降二十三年間に一八五、〇〇〇圓を國庫から補助せられることになつてゐるにも拘らず、水源の水利問題に絡んで市會の市長擁護派と反對派との間に絶えず鬭争が行はれてゐるために、未だに工事に着手するの運に至つてゐない。

この水利問題に至つては別段水利権に關する重大な問題があると言ふわけではなく、たゞ市會の

一部策士が無智な農民を使嗾して市長排斥を企圖してゐるに過ぎないと言はれてゐるし殊に此水源については、最近土地收用法に依る事業認定も受けてゐることであるから、市理事者も徒らに市會の鼻息を窺ふことに腐心しないで敢

然工事に着手する勇氣があつて欲しいし、市會の兩派も市民の保健上一日も忽にすることの出来ないやうな公益事業を私爭の具とすることの非を悟つて、尙進んで市當局を鞭撻して事業を完成せしめるほどの雅量を示して貰ひたいものである。いつまでも遷延して起業の意思のないやうに見られ、折角契約された國庫補助を取消されでもしたら、市議諸君の面目が潰れることは構はないとしても、五萬六千人の那覇市民の損失は永久に償はれないことになるであらう。

縣では今度の國道改良箇所だけは工事施行と同時に送水管を埋設せしめた意嚮で交渉の結果、市に於ても近々準備を整へて急施することになつたと言ふことである。

水道の布設も國道改良の完成と相俟つて那覇市が近代都

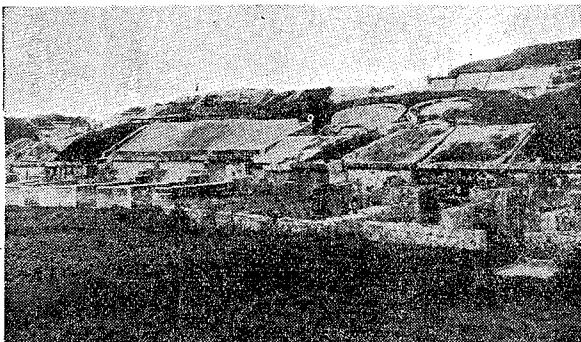
市としての形態を幾分具備することとなるのであるから、都市整備策からしても一日も早く實現せしめたいものと思ふ。

## 墳 墓

琉球で最も旅人の眼を惹くものは墳墓と熱帶性植物の繁茂せる状であらう。

墓は實に宏大なもので到るところに點在してゐる。大抵丘陵の斜面や山麓の樹木を配した景勝の地を占めてゐるが、郡瀬市内では辻原と云ふ所に殊に多數の墓があつて奇觀を呈してゐる。墓の大きさは十坪もあると思はれるものがあるし、小さいのでも三坪を下らないであらう。形は一樣でない、橢圓形のものと屋形のものとが一番多く、

屋根、外廊、前庭まですべて石灰岩で築造してその上に漆喰を塗り固めたものであるから、外觀はコンクリートの建



### 墳

墓を立派に慥へることは琉球人の昔

からの風習であつて例ひ弊屋に住んでゐても、借財をしても、その築造には數百金乃至は數千金を費して惜しまない。中には墓を慥るために生涯働きつゝける男もあるさうだ。死して安住の地を得るためかもしれないが「墓地亡國」など、同行の誰かゞ言つたのも決して駄言ではない。面白いことには家屋同様に、墓の賣買が屢々行はれる事で、従つて有利に賣らんがために墓を作

築物のやうに見える。私は那覇に入港する際船の上で此墓を鐵筋コンクリートの建物のやうに早合點して、後で物笑の種になつたものである。墓の内部は遺憾ながら見る機會がなかつたが、相當廣い室になつてゐて陶器の骨壺が安置してあるのださうである。

るものも出来てくる次第である。墳墓も茲では投資の目的物と看ることが出来るから、これを儲るのに數百金を費さうと、生涯働くと、決して徒勞でないかも知れない。

## 産業

縣廳の側に在る工業指導所や那覇港に近い海濱に在る水產試驗所や那覇市の郊外に在る農事試驗場等を歴訪すると本縣の産業方面の事情を窺知することが出来る。

×

本縣の生産工業はまだ極めて微々たるもので特筆すべきものがない。生産物の主要なものを挙ぐれば砂糖（一二、八〇〇、〇〇〇圓）、泡盛（一一、一二〇〇、〇〇圓）、織物（一、四六八、〇〇〇圓）等である。縣立工業指導所は主として漆器、陶器、織物（芭蕉布）等を、在來の手工業的製造法では品質の均等を缺くばかりでなく、到底一般の需要に應ずることが不可能であるから、之を改革し科學的製造法を案出して一般を指導しやうと言ふ目的の下に設立さ

れたもので、夫々専門の技術家によつて研究中である。私は此處で夫等の標本類を見ながら、本縣の漆器が其の朱色の如何にも鮮明であつて容易に剥脱しないを特徴としてゐることやその工法が大量生産に適しないので世間に推賞されてないことなどを説明された。

水產試驗所には本縣の近海に產する珊瑚礁や海綿類やその他形狀色彩等の異つた珍奇な魚類の標本が陳列されてゐた。水產物の首位を占めるものは鰹で年額一、二四五、〇〇〇圓を產し其の大半は餓節に製せられて縣外に移出され、砂糖に次ぐ本縣の重要生産物となつてゐる。その他鮪の類も相當漁獲されるので目下試驗的に罐詰を製造してゐるがこれはまだ一般の需要を満たす程度に達してゐない。一時裝身用の珊瑚の採取を研究してみたさうだが現在の珊瑚礁を餘程の深さに取除かなければかくの如き珊瑚は得られないものださうで現在の状態では不可能であると言はれてゐる。

農事試驗場では芭蕉果の房が見事に成つてゐるのを見る

事が出来たが、既に一回目の收穫後でまだ食用に供するま

でに熟れてゐなかつたのが殘念であつた。その他には特に

見るべきものはない。係員の説明によれば、

本縣では氣温の關係から一年生の植物は概

ね年二回の收穫を擧げることが出来るので

あるが、米麥類の作付反別は極めて少數で

全島僅かに九〇四八反（收穫石數は六九七

一六石、一六四、〇〇〇圓）に過ぎない。

特に作付反別の多いのは甘藷であつて二九

一〇〇反（一四四、七三五、〇〇〇貫、九

五四八、〇〇〇圓）を算し之に次で甘蕉の

一八、六六八反（七、〇七一、〇〇〇圓）

であらう。甘藷は専ら本島人の常食に供せ

られるのであるが、甘蕉は言ふまでもなく

前記砂糖の原料に供せられるものである。



### 旗亭風月

那霸唯一の旗亭風月と言ふのが、那霸港につゞく入江

—通稱漫湖—の小島の入口の丘上に

ある。島は二個の狹長な橋梁で左右の

岸に繋がれてゐる。此の風月の露臺か

ら見る那霸港の眺望はなかなか棄て難

いものがある。唯露臺の真下の橋の袂

に縣營機械工場があつて、その煙突か

ら絶えず煤烟を吐いてゐるが一寸自障

りになるが、茲からは埠頭につゞく市

の大半を展望することが出来る。那霸

を訪ぶ旅人は一度は必ず此の家へ足を

向けるであらう。那霸市街圖にも麗し

く風月の名が載つてゐる位だから。大

阪型の美形？七人、常に酒間を斡旋して酒も料理も決して不味の方ではない。料理は頗る吟味して調理するので、茲

芭蕉果

のものならアミーバ赤痢に罹る恐はないと言つて（沖縄にはこの輕傳染性疾患が多い）那覇滞在の三日は常に茲で食事を獎められた。茲から見た月夜の那覇埠頭の情景は長く私の脳裡から忘れることが出来ないであらう。

X

琉球料理や所謂琉球情緒なるものを味ふには辻町と云ふ所に出掛けねばならぬ。私はそこの竹の家と言ふ家で琉球料理を味つた。この附近一帯（辻町一丁目—三丁目）は那覇の有名な花街で遊女三千人を擁すと言はれ宛ら女護島の感がある。遊女の數が那覇市人口の六パーセントを占めてゐるには實に啞然たらざるを得なかつた。

琉球料理は豚を主材としたものが多く、支那料理と日本料理とを混合したやうな、頗る原始的なものである。然し

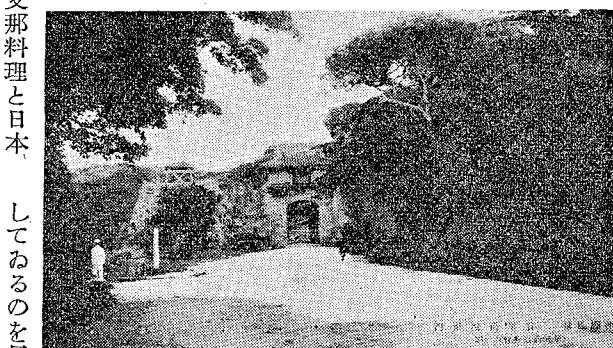
ほど勇敢でなかつたので、その味覺を紹介することは遠慮しておきたい。

### 那覇から名護へ

那覇から本島の西岸を丘陵や平野を

縫ふて蜿蜒として北に走つてゐる府縣道那覇名護線は本縣の代表的府縣道である。私は二日目の朝、例の風月で特に作らせた辨當を持参してこの府縣道を北へ本島を縱走した。

那覇から名護まで二十數里、昔から重要道路になつてゐるが、別に一貫した改良計畫はなく毎年部分的に改良して來て、現に本年度も橋梁二橋を架換してゐるのを目撃した。



名護町は本島北方の権要地である。茲で私は本島人の農

家の生活状態を大體その生活程度によつて上中下の三階に分つて見ることが出来た。一般に本島の農家の生活程度が内地の夫れに比べて低いは想像以上である。其の住居の如きは、上の部類（地主階級であらう）でも先づ内地の中農程度であるが、室數は相當多く床も疊敷になつてゐて他の造作や家具の類も大體備つてゐるが、中下の部類に至つては、殆んど小屋と言つた程度で、室内は板敷か土間で外

部の障壁も多くは有り合せの木片で作つたものか或は庭様のもので蔽つて雨露を凌ぐにも足りない状態である。住居の内外は上中下を通じて極めて不潔で便所の設備なく、大抵毎戸豚を飼育してゐて用便是その豚小屋で達すると言ふ始末である。

本縣の人は農家に限らず一般に甘藷を常食としてゐる、

私は前に本縣の農産物として甘藷が比較的の多額であることとを指摘しておいたが、其の大部分は縣外に移出されるのでなくて、専ら本縣人の常食に供せられるのである。これは貧困のため米麥を攝取することが出来ないのであるとも言

はれてゐるが、また一方では本島人はあまり米食を好まないのであるとも言はれてゐる。米や麥は臺灣同様に年二回収穫することが出来るのに拘らず、其の栽培反別が極めて少く甘藷の比でないことから推して見ると、米食は本島人の嗜好に適しないのか或は舊來から之を攝らなかつた習性が長くつゞいて自然甘藷を好むやうになつたのかもしない。

住居や食物などの異つてゐる關係からか、本島人の體格や健康状態なども一般に甚だ不良のやうに思はれる。途上でも發潮とした元氣のある人に行きあつたことがなかつた。殊に悪いのは裸足の人の多いことで、那覇市内でも履物を穿つたものは甚だ稀であつた。まして一步那覇を離れば履物を穿つたものは皆無と言つていゝ状態である。

服装は男女とも同じやうなものを纏つてゐて帶をしめないものが多い。稀れに兵子帶を前で結んでゐるものもある。婦人は伊豆大島のアンコのやうに物を頭に戴いて歩く。

本島人の性質は一般に因循姑息ださうである。琉球王國

時代支那と薩摩との間に介在して双方から貢物を強要せられたので、人民は勢ひ苛斂誅求の憂目を見た。その結果が本島人の性質をかくの如くならしめたのだと言はれてゐる。

×

前に述べた那覇市水道の水源は此の府県道の沿線に散在してゐるが私はその内二ヶ所を見ることが出来た。一ヶ所は丘陵の中腹から湧出してゐる山間の溪流に等しい水流であつた。今一ヶ所は路傍から湧出して方二間位な水辺に流入して溢れ出てゐた。このやうな水流をも水源の一としなければならぬ所から推せば他の九ヶ所の水源も水量は餘り豊富でなからうと思はれる。

### 名所舊蹟一束

首里へ行つたのは第一日目の暑い晝下りであつた。

通　　信



首里城　舊正殿

那覇を距る一里餘の北方にあたつてゐて指定府縣道那覇首里線に併行して電氣軌道の便がある。今は政治の中心が那覇に移されたが、その昔琉球王國の首都であつた頃の繁榮の跡は今も隨所に見られ古雅閑寂古都の併がある。

舊王城は市の中央丘陵の上に在る、周圍に城壁を繞らし守禮門觀會門など綠樹の間に陰顯する幾つかの樓門と曲折する小徑を辿つて正殿に達するまで二三町の道程がある。その規模の宏壯なる正殿は今は沖繩神社の拜殿になつてゐるが久しく修復のあとなく徒に荒廢するにまかせて、そぞろに行人の涙をそぐるものがある。正殿の左右に様式の異つた建物が相對してゐる。その日本式の建物は王が島津の使者を接見した所であり、支那式のものは支那の使節を引見した所である。

王城の下尚侯爵邸前にある龍潭は重陽の節に爬龍船を浮べて支那の冊封使を饗應した所、其の他圓覺寺などの古刹や舊蹟が多い。

×

舊琉球王尙氏の別業が眞和志村識名と言ふ所にある。今は識名園と稱ばれて、一般には開放されてゐないが、豫め頼めば園内を觀ることを許される。往時王が親しく人民の農業を營む状を見たと言ふ觀農臺が園の一一番高い所にあって、そこからは沖繩本島の南半部の平野を一眸の下に收めることが出来る。

×

那覇の西北海岸に屹立する絶壁の上にある波の上宮は官幣小社に列せられてゐる神社で、伊弉諾命、事解男命、速玉男命の三柱の神を合祀してある。茲の宮司の佐藤氏の好意で、寶永年間此の近海で泛び上つたと言ふ朝鮮の古鐘を見せて貰ふ。今は國寶に指定せられてあるさうだ。此の附近は一帯に風光明媚で、市民行樂の地になつてゐる。

追

記

沖繩には源爲朝の事跡が殊に多い。永萬元年爲朝は手兵を率いて北方連天港に上陸して大いに武威を揮つて、今の府縣道那覇名護線を南下して遂に沖繩全島を征服し統治數年に及んだ。その後爲朝は牧港から單身歸國して遂に沖繩へ戻らなかつたがその妻子（爲朝の子昇天は琉球王の始祖と云はれてゐる）この港の北方丘陵上にある岩窟内で長く彼の歸來を待つたと傳へられてゐる。牧港は待港の轉訛したものださうである。爲朝の居城であつたと云ふ浦添城趾は今も浦添村の丘陵上に残つてゐる。

×

宜野灣村普天間には小さな鐘乳洞があつて洞窟内に天滿宮が鎮座してある。四時行人の杖を曳くものが多い。

こゝから太平洋岸に出ると、隨所に龍舌蘭や榕樹や檳榔樹などが繁茂してゐて南國の平原にある感を深うする。

この稿を書いたのは七月末日であつたが、その後時日が経過するに従つて、記事を訂正する必要が生じて來た。

先づ、失業救濟國道改良工事は豫定より多少遅れて七月下旬に起工したが、九月末日現在の報告によると一八・パーセントの進境を示してゐる。工事は主として側溝の整理、材料の採取等であるが、同時に那霸市を督勵して水道送水管の布設を急がしてゐる。係官は今年中には竣工せしめる豫定で銳意努力中である。

ロシアもどきの名を冠した産業十五ヶ年計畫案も、その後長官自ら上京して大いに奔走されてゐたやうだが、その甲斐あつてか、大體その趣旨は認められることになり、當初の四百二十萬圓案には及ばなかつたが、來年度内務省豫算要求額中に沖繩縣產業振興費三百二十萬圓を計上されるまでに漕ぎつけたさうである。然しそれは内務省で認められたと言ふに過ぎないから、豫算が大藏省に廻附されて今後どの程度に容認せられるかは、豫断を許さない状態にある。縣當局は今一段努力される必要があらう。

那霸市水道は、一層紛糾を重ねて、最近では何か忌はし

い疑獄事件まで惹起したやうな噂があるのは遺憾にたへない。悉い情報はないが、一日も速に解決して市民の福利を増進されるやう、重ねて市理事者に切望して止まない。

由來沖繩縣は島國に似ず政争の激しい所だと聞いて、一寸意外の感にうたれた。島國根性で郷黨相結んで排他的に流れ易いのであらう。現縣會の分野も、政民伯仲、互に鎬を削り、一二中立議員に奔弄されてゐる。那霸市會も縣會の轍を踏んでゐることは前言の通りである。

沖繩縣を振興せしめるのには、單に豫算を増額したり、事業を興したりするだけでは、充分の効果を期待することは出来ないであらう。私は内地と著しく事情を異にした本縣のやうな所では、縣當路者を優遇して十分その手腕力量を發揮する機会を得しめることも急務の一つでなからうかと考へる。從來長官はもとより、縣首腦部が屢々更迭せられ、長く茲に赴任してゐる人でも二年を超えない現状では、縣自體の振興は期し得られないやうに思ふ。